

# 大阪養老院の機関誌『養老新報』についての考察Ⅰ

寅垣内 す が

京都福祉専門学校

## A study on the Bulletin of Asylum-Osaka, YOUROU-SINPOU.NO.1

Suga Toragaito

*Kyoto Fukushi College*

本研究においては、1902（明治35）年に創設された、百年以上の歴史を持つ、現大阪老人ホームの明治時代に発行された機関誌、『養老新報』の分析を行うことが目的である。『養老新報』に記載されている、養老院での入所者の生活、入退所状況と共に決算の報告や寄付一覧、事業内容等々を分析することで当時の養老施設の姿を明確にし、その解析した内容を総合し、蓄積した結果を今後の講義の中で、学生たちに先人の遺した偉業として伝達していくことが最終目標である。ここでは、大阪養老院の初代施設長、岩田民次郎が『養老新報』を発行するまでの背景や歴史、『養老新報』の概要を紹介する。

**キーワード：**明治35年創立の大阪養老院、初代施設長岩田民次郎、機関誌『養老新報』

## 1. はじめに

現在、日本においては、特別養護老人ホーム、児童養護施設など、高齢者から児童対象に至るまで多種多様な施設が存在している。将来、施設を含め社会福祉の道に進む学生が、現存する施設の歴史について学ぶことは重要である。国家資格である、社会福祉士や精神保健福祉士などの社会福祉専門職のカリキュラムの中に社会福祉の歴史を学ぶ項目はある。しかし、ただ単に社会福祉の歴史の流れを学生に教授するだけでは、大阪養老院を設立した岩田民次郎のように、社会福祉に関する理解が国にも一般の人々にも乏しかった時代に、私財を投げ打ってまで施設を創立し、苦難の中で利用者のために施設を維持し続けた、苦勞は学生たちには伝わらないのである。大阪養老院は、現在も百年以上の歴史を持つ大阪老人ホームとして、維持発展を続けている。社会福祉の専門職を養成する教員として、大阪養老院の設立当初の苦難の歴史がそのまま読み取ることが出来る『養老新報』<sup>1)</sup>を研究することは重要なことである。教員の裁量と力量が試されることにもなろうと思われるが、『養老新報』を分析し、解明された事実を蓄積し、貴重な歴史の証言を学生たちに伝えていくつもりである。

## 2. 大阪養老院の機関誌について

大阪府松原市に現存する社会福祉法人聖徳会大阪老人ホームは、1902（明治35）年に岩田民次郎によって大阪養老院として創設された。2010（平成22）年春には全室、個室ユニット型の定員88名の大阪老人ホームうえだも新たに開設し、民次郎が施設を創設し、100年以上を経た現在においても発展を続けているのである。

大阪養老院の創設当初の入所者は、わずか3人であった。全国的にみても当時の養老院は、1890（明治23）年に創設された神戸養老院や1895（明治28）年に創設された、聖ヒルダ養老院、1901（明治34）年創設の名古屋養老院など数えるほどであった<sup>2)</sup>。大阪養老院に対する大阪府の対応は当初冷酷なもので担当者に「私財を用いて、わざわざ事業を起こすことはいらぬことである」との旨を言い渡され、開設を待ちわびる人々が存在したのにもかかわらず、なかなか設立の許可がおりなかった<sup>3)</sup>。

そのため民次郎は、行政の許可を待たず、機関誌『養老新報』の発行届けを大阪府警本部に提出して、利用者を迎える準備を整えたのである。発行届けを提出した翌年に第1号となる『養老新報』を発行した。

民次郎は行政との交渉を行いつつ、『養老新報』の発行準備を着々と整えながら、慈善新報社の辰谷辰兄、汎愛扶植会の加島敏雄や博愛会の林歌子等に相談し、努力を続けていた。この頃大阪のいくつかの施設では、すでに機関誌を発行しており、民次郎は、多くの人々の支援を得るためには、心に訴える広報活動は不可欠であると考えていたのであろう。『養老新報』の発行について、編集と執筆は学校新聞の井上恒次、田川文海翁の指導を受け、専門的、本格的な広報誌を目指したのであった。なお1903（明治36）年にやっと大阪府より、大阪養老院の設立の許可が下りたのであった（図1）<sup>3)</sup>。

『養老新報』は月刊誌であり、販売金額は1部2銭で1年分を前納すると、20銭に割引される特典がある。『養老新報』の発行部数は、第1号では500部であったが、その後第3号以降は増刷して、1000部前後となっている。送付先は、旧皇族、中央や地方の各関係官庁、慈善団体、寄付者であった。『養老新報』の第1号は、1903（明治36）年1月10日付で発行された<sup>3)</sup>。1号から第56号まで発行されているが、残念ながら、すべて施設に現存しているわけではないのである<sup>1)</sup>。記念すべき第1号から2号には「大阪養老院設立趣意書」と大阪府に大阪養老院の設立を申請した際、提出した「大阪養老院概説」及び「大阪養老院収容に関する規定」を掲載している。特に「大阪養老院設立趣意書」の紙面上の公開には重要な意味がある。なぜならば、当時は養老院の存在自体が広く世の中に認められているとはいいがたく、養老院設立に当たって、その設立の目的意識、使命を明確にし、訴えていく必要性があったからである。「大阪養老院設立趣意書」には、民次郎の養老事業に対する熱い思いが表現されている。また施設運営のための財源を確保し、施設への寄付金をより多く集めるためにも、『養老新報』の発行はPRの一環として、必要だったのである<sup>2)</sup>。



図1 大阪養老院の様子

1904（明治37）年 養老院には病室も設けられた。

### 3.『養老新報』からみた大阪養老院

1903（明治36）年に大阪府の許可を得て、養老院の開設まで、無事こぎつけた民次郎であったが、その設立のきっかけとなったのが、1891（明治34）年の民次郎の故郷を襲った濃尾地震であった。

民次郎は愛知県一宮市出身であったが、濃尾大地震は死者、7273名、負傷者17175名という甚大な被害をもたらしたのである。濃尾大地震が起こった際に民次郎は、長時間をかけて、鉄路を歩き、避難所にいる両親を訪ねていったのである。その地震の際に全国から莫大な義捐金が寄せられ、その恩返しの意味もあって、民次郎は社会的慈善事業を始めたのである。また民次郎は、養老事業のみならず育児事業にも関心があったようである。実際に1906（明治39）年に東北で大飢饉が起こり、新聞記事に一日に何十人となく、餓死するという内容が掲載されると、民次郎は直ぐに慰問品を持参、現地を視察した。岩手、宮城、福島の子の高齢者約20人、子どもを含めると100人以上の人々を保護し、大阪に連れ帰ったのである<sup>4)</sup>。1906（明治39）年発行の『養老新報』第40号には、現地から大阪までの一行の道中の状況が詳しく記載されている。まずは、山間地に生まれた子どもたちが初めて、汽車に乗車し、珍しく思う様子が紹介されている。現地から汽車で東京に向かい到着した折に、一行が都会の町並みや車や人の往来する様子を目撃し、驚いた様子や浅草公園の電気館や花屋敷、銀座も観覧し、楽しいひと時を過ごした様子などが記載されている。誰一人として望郷の念に捉われず、ひたすら歓喜の思いに満たされた一行の様子が語られおり、一行は浅草の九品寺に二泊し、新橋駅から汽車に乗り、翌朝の5時に大阪に到着した事も報告されている。

その後、民次郎は、子どもを四天王寺にある元秋野坊という、寺院を借りて入所させ「大阪養老院付属少年部」を創設した。そして、高齢者も大阪養老院に入所することになったが、一気に入所者が増加し、施設を経営難に陥れるという悲惨な結果になってしまったのである。しかし、そのような状況のなかで施設の支えとなったのは、多くの人々の支援であった。東北から民次郎が多くの被災者を保護したことを知って、衣類や布団、子ども達の学習用の教科書等も含め、支援者からの寄贈が相次いだのであった。やはり、このような支援を得ることが出来るのも日頃から『養老新報』を発行し、利用者の様子から一般の人々のボランティア活動の様子、施設の財源にまつわる内容にいたるまで、さまざまなことを民次郎は広く世間に伝達する努力を行ってきたからであると思われる。

たとえば、1903（明治36）年発行の『養老新報』第3号には、聴覚障害者のS・Sの入所までのいきさつが紹介されている。S・Sは、自らの出生の状況なども知らず、S・Sという名前も役所に命名され、籍に入れられた仮の名前であった。S・Sは生まれながらに器用であったことを活かし、産毛抜きを生業として、悪人に騙され、利益を巻き上げながらも生きてきた。しかし、不幸にして事故に遭い、頭部に怪我を負ってしまい、仕事もままならず、ついに浮浪者となってしまったのである。中ノ島公園に寝起きして、憲兵に咎められたりなど、ただ死を待つだけと思われる状態を見かねた人々が大阪養老院の入所を申し込んでくれ、大阪養老院へ入所できる運びとなった。S・Sの手真似で表現する、今まで経験してきたことへの憂いと、入所できた現在の喜びを語る様子を見て、それを見る者が同情の涙を流してしまうほどであったという主旨の内容が記されている。『養老新報』の記事は、厳しい社会の中で風雪に耐え、生きてきたS・Sが大阪養老院に収容され、安息の場をやっと得られたさまを表しているものであった。以上のように被収容者の略歴として、入所者が採りあげられ『養老新報』で連載されている。現代では考えられないことであるが、全て実名で年齢等も記されている。入所者の生きてきた半生が過酷なほど、『養老新報』を読む側の胸に迫ってくるようである。『養老新報』には「養老院の日誌・院主記」という欄もある。たとえば3号の1903（明治36）年2月14日付には、藤村病院長、収容患者の診察来院とある。定期的に医師が来診し、収容者の健康管理がなされていることが窺える内容である（図2）。

また2月19日と22日、23日、24日には入所者、法善寺に参拝したという記載がある。1903（明治36）年の4月10日発行の第4号にも、3月22日の日付の項に、本日は彼岸の中日で、天気も良いので入所者一同、事務員が付き添って、天王寺に参拝したという記載もある。『養老事業』の18号の「私設養老事業の感想」の中で民次郎は、収容者を健康上や信仰も兼ねて神社仏閣に参拝させるとの事を述べているので、これは現在風に例えるならば、利用者のための一種のレクリエーションといえるであろう<sup>5)</sup>。

現代のように、明治時代にもボランティア活動を行う人々が存在し、『養老新報』に採り上げられている。まず、1903（明治36）年の3月10日発行の3号の「養老院の日誌・院主記」には、大阪養老院の設立に賛同し、力を尽くしてくれる呉服商、中津秀堅の活動について記載されている。中津は2月10日に、一心寺から寄付された薪用の古木を車に積み、番頭と共に運搬して来られたとの内容である。同氏については、1903（明治36）年2月10日発行の第2号の「厚意録」に詳しく紹介されている。中津は西区江戸堀一丁目で呉服商を営みながら、不幸な高齢者23名の保護を行うような熱心な人である。大阪養老院の設立についても喜び賛同し、本業の暇をみても来院し、利用者を慰め労ってくれる。中津のよう



な理解者を得て、大阪養老院の事業も益々、将来に多くの望みが持てるという内容で締めくくられている。

次に、1903（明治36）年の4月10日発行の第4号の「養老院の日誌・院主記」に、3月8日に難波新地の床竹殿が来られて、入所者の頭そりと理髪を行われた。一週間位後に再び無料の奉仕を行うため、大阪養老院へ来所するとの申し込みをされた旨の記述がある。また、1904（明治37）年1月1日発行の30号には、「学生諸君の同情」という記事がある。姫路師範学校の学生が姫路師範学校生徒慈善会を組織し、慈善活動を行って、世の慈善事業に貢献している。色々な所で慈善幻燈会を開催して、一般の人々の慈善事業への理解を喚起したり、宿舍内に理髪室を設け、学生同士で理髪し、本来理髪料として使うべき金額を貯金し、多少にかかわらず、慈善事業に寄付する努力をしている。このような学生たちの奇特定の志は、一般の学生たちの手本にするべきである。姫路師範学校生徒慈善会の学生たちが『養老新報』を読んで金銭を寄贈してくれたことは、実に感謝に堪えず、謹んで謝意を表すという内容であった。

以上『養老新報』の記載をみても、現在と同様に一般の人々ボランティアとして、大阪養老院のために事業の手助けだけでなく、財政面でも力となり、その上、入所者とかかわりを持ち、利用者の気持ちの支えにもなるという役割を果たしていたのである。困っている人々のために力になりたいという民次郎の熱い思いが『養老新報』という広報誌を媒体として届けられ、支援者を増やす一助となっていたと考えられる<sup>1)</sup>。



図2 大阪養老院の様子  
1904（明治37）年 病室内の様子

## 4. おわりに

明治、大正期の養老院は制度化された施設ではなかったため、運営費は自己財産か寄付以外に仰ぐしかなかった。それゆえ明確な養老院設立の趣旨を広報しに地域の人びとや名士に養老事業の理解を深めてもらい、その事業の報告を行う目的を持った広報紙が発行されていた。これら広報紙には養老院の生活や入退所状況と共に決算の報告や寄付一覧を掲載し、一般の人びとの力添えを求めたのである。

広報紙を発行することにより、寄付などさまざまな善意をもって養老院を支えてくれる人びとには感謝の気持を表明し、その上で事業内容や収支決算書、寄付者名簿、養老院の啓蒙記事を掲載して施設に対する理解を深めてもらえるよう働きかけを行ってきたのであった。しかし、地域の人びとだけではなく施設から離れた場所に存在する支援者にも広報紙を送ることにより、その人たちにも日々の記録から養老院の暮らしの様子を認識してもらいよいチャンスになったことであろう。

数号の『養老新報』を照合しただけでも、大阪養老院の状況や利用者の暮らしぶりやそれに関わる人々の様子が垣間見ることが出来る。『養老新報』を読み解くことは、容易いことではなく、時代背景、風俗風習、人々の思想、ありとあらゆる事柄に精通した上での分析と広い視野が必要である。今後も研究を深め、大阪養老院に現存する貴重な財産である『養老新報』を読み解き、さまざまな角度で分析を重ねていくつもりである。

## 謝辞

貴重な写真の掲載許可を頂き、また論文化にあたり、暖かい励ましを頂いた社会福祉法人聖徳会大阪老人ホーム岩田克夫会長に心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 小笠原祐次 (1992) 養老新報. 第1号～56号. 老人問題基本文献集 24巻. 大空社.
- 2) 創立90周年事業実行委員会 (1992) 道ひとすじ・大阪老人ホームフォトグラフィティ. 17pp. 社会福祉法人聖徳会.
- 3) 山本啓太郎 (2008) 岩田民次郎. 室田保夫編著. 人物で読む近代日本社会福祉のあゆみ. ミネルヴァ書房. 85-91.
- 4) 泉道夫 (1982) 道ひとすじ. 大阪老人ホーム2代の奇跡. 58-60. 社会福祉法人聖徳会.
- 5) 岩田民次郎 (1939) 私設養老事業の感想. 小笠原祐次. (1992) 老人問題集基本文献集11巻18号. 25-27. 大空社.